



TITLE:

イタリア文献学と古典文献学の間 -
-クローチェ、パスクアーリ、バル
ビの「方法」を巡る問い--

AUTHOR(S):

竹下, 哲文

CITATION:

竹下, 哲文. イタリア文献学と古典文献学の間 --クローチェ、パスクアーリ、バルビの「方法」を巡る問い-. 天野恵先生退職記念論文集
2018: 279-299

ISSUE DATE:

2018-03-29

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233698>

RIGHT:

イタリア文献学と古典文献学の間 —— クローチェ、パスクァーリ、バルビの「方法」を巡る問い ——

竹下 哲文

はじめに

近代的な文献学の歴史をたどると、写本の派生関係に基づき原型のテキストを再建する「ラッハマンの方法」を出発点とし、それに対する批判や擁護を通して発展してきたという大きな流れが見えてくる。こうした手法はガストン・パリスらによってロマンス語文献の研究にも応用されるようになったが、それに対して懐疑的な批判を展開した代表的人物がジョゼフ・ベディエであった。またイタリアには、写本伝承の複雑さという点から系図法の限界を示唆したジョルジョ・パスクァーリ、ベディエらの立場を批判しつつ問題の多様性・個別性をよく理解したうえで数ある方法のうちのひとつとして「ラッハマンの方法」を評価するミケーレ・バルビといった文献学者たちがいた¹。しかし、そもそもの「ラッハマンの方法」が孕んでいた問題とそれがその後の文献学の世界に巻き起こした影響を視野に収めると異なった見方が可能になってくる。すなわち、それは単なる方法論の発展史ではなく、文献学の役割、文学研究における客観性をめぐる論争の歴史の一角をなしているのである。そしてこの論争はとりわけイタリアにおいて特殊な展開を見せた。本稿では特にクローチェ、パスクァーリ、バルビという三人に注目して、彼らの議論の歴史的文脈、とりわけイタリア文献学と古典文献学の両領域にわたって展開されたその射程の広さを明らかにすることを目的とする。

以下ではまず(1)「ラッハマンの方法」とそれに対するベディエの批判を確認する。その後(2)ティンパナーロの明らかにした「ラッハマンの方法」の起源に関する問題とそれ以後の古典文献学界の展開を概観する。そして(3)クローチェとパスクァーリの間で交わされた文献学と「批評 critica」のあり方を巡る論争を辿り、(4)バルビの示した文献学観の意義を再確認する。バルビによって拓かれた方向性が単なる方法論上の新しさに尽きるものでないことはすでに指摘されているとおりだが²、イタリア文学と古典文学という領域を横断したクローチェとパスクァーリの論争を踏まえることで、一連の議論の新たな側面が明らかになるであろう。すなわち、客観的な方法の追求が文学研究に影響を及ぼす中で示されたクローチェの挑戦的な文献学批判とそれ

¹ Stoppelli (2013: 87-96) はラッハマンの方法の限界と題した章でベディエ、パスクァーリ、バルビという議論の流れを簡潔に整理している。Contini (1986: 7) はベディエやドン・カンタン (dom Henri Quentin) を「反ラッハマン主義 antilachmannismo」、パスクァーリやバルビを「ポスト・ラッハマン主義 postlachmannismo」と形容した後で「新ラッハマン主義 neolachmannismo」なるものをも示唆している。

² Branca 1994: 9.

に対する歴史主義的文献学者としてのパスクァーリの応答、そして、美的批評・作品論と文献学・本文批判の調停者としてのバルビの姿である。

1. 「ラッハマンの方法」とベディエの批判

ラッハマンの方法とはドイツの古典文献学者カール・ラッハマン (Karl Lachmann) がルクレティウス『事物の本性について』の序文で示したとされる本文批判上の方法論であり³、近代的な文献学の成立において重要な転換点をなしたとされる。テキスト編集の過程を、現存する諸写本の比較検討、すなわち「校合 recensio」を通してそれらの系統関係を調べ、元となる「原型 archetypus」を復元し、そこから得られる読みが満足でない場合に「修正 emendatio」が必要となる、という段階に分けて実践する方針を示した。

この系統関係の調査に際して着目されるのは「誤り」である。複数の写本の間に共通して見られる誤記を手掛かりに写本をグループに分け、それらの間の派生関係を「写本系図 stemma codicum」と呼ばれる系統樹の形で再現することができる。

この方法がとりわけ画期的だったのは次の二点である。まず、系図を描くことによって派生関係を明示した結果、親本が現存しているならば、そこからの派生本は理論上無視しても差し支えないということ、すなわち「派生写本の削除 eliminatio codicum descriptorum」が行えるということ、それから原型のテキストを個別の読みの内容に立ち入らずに確定できるということであった。

写本の派生関係を調査する必要性は古典文献学のみならず、中世の文献を対象とした研究にも広がりを見せていく。ロマンス語文献学におけるこの手法の紹介者がガストン・パリシ (Gaston Paris) であったが、一方でこうした方法論に疑義を呈する学者たちも現れてくる。そのなかでとりわけ重要なのがジョゼフ・ベディエ (Joseph Bédier) であった。

1. 1 ベディエと『水鏡の歌』

ベディエが取り組んだのは13世紀初頭（おそらく1217年から1219年の間）にジャン・ルナール (Jean Renart) という詩人によって書かれた『水鏡の歌』 (*Lai de l'Ombre*) という1000行ほどの作品であった。この小品は7つの写本によって今に伝えられており、それらはいずれも原作から60年ほど後に作られたものである。短い作品ながら、写本の提供する異読は非常に多く、1700もの数に及ぶ。これらの写本を調査した結果、ベディエは1890年に『水鏡の歌』の校訂テキストを刊行した⁴。

³ *Caroli Lachmanni in T. Lucretii Cari de rerum natura libros commentarius iterum editus*, Berolini, G. Reimer, 1855 [1^a ed., 1850; rist. anast. della 2^a ed., New York, Garland Pub., 1979].

⁴ *Le lai de l'Ombre*, publié par Joseph Bédier, Fribourg, imprimerie et librairie de l'Œuvre de Saint-Paul, 1890.

1. 2 パリスからの批判

しかしその同年、師であるパリスによってベディエの系図は批判を受ける⁵。ベディエの示した系図が原型からふたつに枝分かれした二分枝の形であったのに対し、パリスは系図を三分枝に考えるべきだと主張した。

二分枝か三分枝かという違いは重要な意味を持つ。ベディエのモデルの場合、2本に分かれたグループがそれぞれ違う読みを呈示した場合、原型の読みを決定するためにはそれぞれの読みの内容に立ち入って選択を行わなくてはならない。他方、パリスのモデルの場合、3本に分かれた枝のなかに少なくとも2つ一致する読みがあればそれが原型の読みとなり、しかもこの方法で原型の読みが決定できないのは、3本の枝それぞれが異なる読みを呈示するという稀なケースに限られるのである。

1. 3 恣意性の介入という問題

さて、パリスによる批判を受けた後、ベディエはさらに研究を重ねていくなかで、系図法を用いた校訂版に奇妙な偏りがあることに気づく。そして再び、しかし最初とは異なった方法で『水鏡の歌』のエディション作成に取り組むことになる。その研究成果が1928年に「Romania」誌上に発表された *La tradition manuscrite du « Lai de l'Ombre » : réflexions sur l'art d'éditer les anciens textes* であった。

上述のパリスは、ベディエの系図を批判して自身のものを描きなおしたのだが、そこから実際に本文を作る作業には移らなかった。このように、系図を作ることだけを、いわば将来のエディションの予備作業として行う学者は他にもいたが、そうした人々の提示するものはことごとく原型から3本の枝が分かれる系図であり、他方で自らエディションを作ることまで行った人々の系図は原型から2本の枝が分かれる系図に偏っているのである。ベディエの行った統計を信じるならば、110例中105例までが二分枝の系図を描いていたという⁶。

ここで先にパリスの批判に触れた際に述べた枝の分かれ方による相違を思い出そう。三分枝のケースでは、理論上は原型の読みが機械的に決定できると述べたが、これはあくまで理論上の話に過ぎない。異なる枝に同じ読みが現れたとしても、それが独立に生じた誤記である可能性は依然として存在し続ける。そしてこの可能性は、実際に本文を確定する作業に臨む者には常に不安要因として付きまとう。そこからベディエは、文献学者たちが「潜在意識の奥底に隠れた漠たる力 *des forces obscures, confinées dans les profondeurs du subconscient*」によって異読を自分の判断で選択できる二分枝の系図を望んだためにこのような偏りが生じたと推測するのである⁷。そしてかつての自身のテキストを再検討し、次のような結論に達する。

A examiner de nouveau les variantes, je reconnus bien, comme l'avait fait G. Paris, le

⁵ *Compte-rendu du «Lai de l'Ombre, publié par Joseph Bédier. Fribourg, impr. et libr. de l'Œuvre de Saint-Paul, 1890, in-4o, 59 p.» in «Romania» XIX, 609-615.*

⁶ Bédier 1928: 8-11.

⁷ Bédier 1928: 15.

caractère illusoire, l'extrême fragilité des arguments que j'avais invoqués à l'époque pour me justifier d'avoir dessiné la fourche fatale. Mais il m'apparut aussi ... que mon système d'antan pouvait subsister néanmoins, à titre d'hypothèse indémontrée, mais plausible pourtant et peut-être vraie, et qu'il n'y avait nulle raison de le rejeter en faveur du système de G. Paris, lequel ne représente à son tour qu'une hypothèse plausible, et vraie peut-être, mais pareillement indémontrée;

改めて異読を調査すると私は、パリスが示したとおり、当時自分が決定的な分岐図を描いたと証明するために持ち出した論拠の空疎な性格とこの上もない脆さを認めるにいたった。しかし同時にまた私にはこうも思われたのだ……かつての私の体系は、証明こそされないもののもっともらしく、もしかすると正しいかもしれない仮説という名の下に依然として存続する、そしてその体系を斥けパリスの体系——これもまたもっともらしく真でありうるが、やはり証明されない仮説である——の方を優先する理由は存在しない、と。(Bédier 1928: 16-17)

ベディエはこうした研究に基づき、系図法の限界を主張した。系図は絶対的な確実性を持つものではなく、むしろ解釈のひとつの有様に過ぎない。その代わりに彼が持ち出したのは、現存する写本を調べた上でその中から「最良の」写本を選び、それに修正を加えてエディションを作成するという方法であった。これはそれ以前の文献批判の方法のひとつである「最良写本 *codex optimus*」への依拠という原理を改良したものと言える⁸。

2. ラッハマンの方法の起源とその問題

2. 1 『ラッハマンの方法の誕生』

ところで以上の議論の中では系図法はラッハマンの名前に帰されていた⁹。しかし、その方法がどのような起源をもつのか、それは本当にラッハマンのものなのか、という問題はあまり注目されてこなかった。この点を、多数の文献を渉猟して明らかにしたのが、セバスティアノー・ティンパナーロ (Sebastiano Timpanaro) というイタリアの古典文献学者であった。『ラッハマンの方法の誕生』(*La genesi del metodo del Lachmann*) と題されたティンパナーロの研究は、ラッハマンの方法という名で理解されてきた文献研究の手法を構成する諸要素はラッハマン以前、またその同時代の学者たちによって考案・実践されてきたものであったことを明らかにした。はじめに系図法の効能のひとつとして挙げた「派生写本の除去 *eliminatio codicum descriptorum*」についてはポリツィアーノ、原型という概念はエラスムスのようなルネサンス期の人文主義者たちにすでに見出せる。また古典文献にのみ視野を絞っていは、「受容さ

⁸ ベディエの取った立場とその詳細、またドン・カンタンによるラッハマンの方法の批判的検討については松原 (1963: 111-117) も参照。

⁹ ベディエ自身も「ラッハマンの方法」がどのように形成されたか詳細はわからないとしつつもその呼称を用いている。Cfr. Bédier 1928: 3-4.

れた本文」への疑義という点での新約聖書文献学の重要性や、ラッハマン自身の新約聖書校訂においてこそよりよく示された理念—— *recensio* と *emendatio* の区別、「解釈なき校合 *recensio sine interpretatione*」——を見過ごしてしまいがちである。そしてマズヴィ（Johan Nicolai Madvig）やリツチュル（Friedrich Ritschl）、ラッハマンと同時期にルクレーティウスの本文研究に携わったベルナイス（Jacob Bernays）らの貢献には十分な注意が向けられなくてはならない。

ティンパナーロはルクレーティウスの本文研究におけるラッハマン独自の貢献として「特異な読みの除去 *eliminatio lectionum singularium*」の実践と失われてしまった原型の物理的特徴の復元という二点を挙げる¹⁰。文献批判の方法の発展に対してラッハマンの果たした貢献は無視できるものではないにせよ、これをもって「ラッハマンの方法」と呼ぶことにはある種の不正確さ・不公正さが伴うと言わざるを得ないことになる。

その後ラッハマンの名前がことさらに強調され、方法に対する理解が錯綜していった歴史的背景は複雑だが¹¹、とくに重要なのは当時のドイツの文献学界の事情である。写本伝承にあまり関心を持たなかったヘルマン（Gottfried Hermann）や写本の体系だった比較検討に注意を向けなかったベッカー（Immanuel Bekker）などと比べたときラッハマンの業績が鮮烈な印象をもたらした可能性がある¹²。しかしそれに加えて、ラッハマンをいわば神格化したり、他の学者と差別化する形で彼の名前をことさらに「方法」と結びつけたりする傾向があったことも事実である。この傾向はとりわけ彼の弟子であるモーリッツ・ハウプト（Moriz Haupt）に顕著に認められる¹³。

2. 2 方法の余波——古典文献学における懐疑と保守の二極化

さて、ラッハマン以後の古典文献学は、この「方法」を巡っておおきな二極化を経験する。というのも、伝承本文に対する態度として、それを疑い修正しようとする懐疑的な方向性と、それを可能な限り維持しようとする保守的な方向性とが文献学の中にはながら共存していたのだが、新たな方法（の名を冠したもの）を得たことにより、このふたつの路線がいわば先鋭化する結果となった。Kenneyは次のように書いている。

¹⁰ Timpanaro 1985: 76-78.

¹¹ この問題については Fiesoli (2000: 359-461) を参照。

¹² Timpanaro 1985: 45-46.

¹³ Timpanaro 1985: 86-88; Kenney 1976: 110-111; Fiesoli 2000: 365-367. Fiesoli はラッハマンの伝記を書いたヘルツの影響もハウプトのそれと並んで決定的なものであったと述べている。ラッハマンを称讃するハウプトの態度は Haupt: 1911 に見ることができる。教育者としてではなく *criticus* としてのラッハマンを主題としてその幅広く深い学識を称えるこの講演でハウプトは、彼の *ars critica* の実践において一番重要なこととして *recensio* と *emendatio* の区別を挙げ (Haupt 1911: 534)、前者における「判断の厳しさと堅固さ *iudicii severitate atque constantia*」や「いわば数学的な論証 *argumentatione quasi mathematica*」による原型の復元、後者における「判断の自由さと節度 *iudicii magna libertate et modestia*」を強調している (Haupt 1911: 534-535)。もっとも *emendatio* という営み自体はそれまでも行われてきたということを鑑みると、*recensio* に関わる前者の要素により焦点が当てられているように思われる。またラッハマンと同時期にルクレーティウスの本文研究に携わったベルナイスが、ラッハマンと敵対関係にあるリツチュルの弟子であったことも考慮に値する。ラッハマンのエディションが世に問われる前後の彼らを巡る一連の経緯は Butterfield (2013: 13-16) を参照。

Confidence in method became the hallmark and the besetting weakness of a country and an age ... The effect on textual criticism was not so much to create new tensions as to exacerbate existing differences: for both 'radical' and 'conservative' critics were armed with the same weapons and inspired by the same belief in their complete efficacy.

「方法 method」に対する信頼はひとつの国そしてひとつの時代の特徴となりまたそこにつきまとう弱点となった……それが本文批判に及ぼした影響は新しい緊張状態を作り出すというよりはむしろ既存の差異を深刻化させるものだった。「急進的な」批評家も「保守的な」批評家も共に同じ武器で武装し、自分たちの技能の完全性という同じ信念に導かれていた。(Kenney 1976: 111-112)

またこうした両極化は主としてドイツで発生した現象であるが、特に推定に基づく大胆な本文修正を恐れない懐疑派の潮流に対して、イタリアの古典学者たちの中には反感をいだく者が少なくなかった。こうした潮流は20世紀に入ってもナショナリズムという装いのもとエットレ・ロマニョーリ (Ettore Romagnoli) らによって支持され影響力を持った¹⁴。

しかしその彼らにしても実際には正当な保守主義というよりもむしろ一種の思考停止に陥ってしまっていたことは否めない。ティンパナーロはそうした学者たちについて次のようにコメントしている。

essi infatti rifuggivano, non meno che dalle congetture, dalle ricerche minute di sintassi, di lessico, di prosodia e metrica, cioè da tutte quelle conoscenze di «filologia formale» che permettono di confutare le cattive congetture e di ristabilire le lezione manoscritte.

実際のところ彼らは推定修正から逃げるのに劣らず、統語論や語彙、詩形や韻律についての細かな研究——つまり、よくない推定修正を斥け写本の読みを支持することを可能にする「正式な文献学」のあらゆる知識——から逃げたのだった。(Timpanaro 1953: 674)

2. 3 ハウスマンの保守主義批判

こうした反動的な保守主義、あるいはその名のもとに横行する思考停止を鋭く批判したのがイギリスの古典文献学者アルフレッド・エドワード・ハウスマンであった¹⁵。写本の比較校合や重み付けについて一定の進歩が実際にあったことは認めつつも、彼

¹⁴ そうした反ドイツの傾向はたとえば古典叢書 *Corpus Paravianum* に携わったカルロ・パスカル (Carlo Pascal) などに顕著で、彼はドイツの学者が行った推定修正を排除しようとした。Cfr. Timpanaro 1953: 673-674.

¹⁵ 彼はその舌鋒の鋭さでもよく知られている。たとえばルーカースの校訂テキストの序文では保守的な学者をこう貶している。«It would not be true to say that all conservative scholars are stupid, but it is very near to the truth to say that all stupid scholars are conservative». (Housman 1926: xxvii)

は、それを騙って単一の写本にのみ権威を持たせようとする人々を非難している。

Those who live and move and have their being in the world of words and not of things, and employ language less as a vehicle than as a substitute for thought, are readily duped by the assertion that this stolid adherence to a favourite MS, instead of being, as it is, a private and personal necessity imposed on certain editors by their congenital defects, is a principle; and that its name is ‘scientific criticism’ or ‘critical method’.

物質ではなく言葉の世界に暮らし活動し存在していて、言語というものを思考の伝達手段というよりその代替として用いる人々は、このように勝手に選んだひとつの写本に無神経にも固執する行為が、ある種の編者たちにとって生まれつきの欠陥のために課された私的で個人的な必要なのではなく——実際にはそうなのだが——ひとつの原理であり、そしてその名は「科学的批判」あるいは「批判的方法」である、という主張にたやすく騙されてしまう。(Housman 1903: xxxii)

彼によれば、19世紀前半の学者たちの大胆でときに不用意な修正への嫌悪感が、19世紀後半の保守傾向につながり、そうした人々は自分たちのやり方を正当化するために、先人たちの大胆さには「天性 Genialität」を、自分たちにはそれを補う「思慮 Umsicht」を帰している¹⁶。そして今日ではそうした後退現象の結果、詩人の作ったものを修正してしまう代わりに写字生が作ったものを解釈することが流行になってしまったという¹⁷。

そのハウスマンがこの問題に関して自らの見解を述べた重要な論文として *Application of Thought to Textual Criticism* がある¹⁸。この論文の中で彼はまず、「本文批判 textual criticism」は、テキストの中の誤りを見つける science であり、それを取り除く art である、と規定した上で、それは精密科学とは異なっていて、よき「批評家 critic」の資質は稀であり「成るものではなく生まれるもの criticus nascitur, non fit」と言う。とはいえ思考を適用するという行為は才能ではなく習慣であるはずだが、昨今では問題の個別性を認識しないまま思考ではなくて機械的な規則を適用しようとする人々が見られるとし、特に写本の価値を軽率に決めてしまうことを批判する。そして本文批判に際し何より重要なのは思考であることを強調してハウプトの言葉を賛意と共に引用する。

‘The prime requisite of a good emendation’, said he (= Haupt), ‘is that it should start from the thought; it is only afterwards that other considerations, such as those of metre, or possibilities, such as the interchange of letters, are taken into account’

「よき修正が最初に求めるのは」と彼は言う、「思考から出発すべきであるとい

¹⁶ Housman 1903: xlii.

¹⁷ Housman 1903: xliii.

¹⁸ Housman 1921.

うことである。韻律の考慮をはじめとするそのほかのことを考察したり、字母の置換といった可能性が考慮に入れられるのはその後なのである」(Housman 1921: 1065)

これについては、ハウスマンが自ら推定修正を試みる際に見せる大胆さの点で懷疑主義に傾いているということを指摘できるだろう¹⁹。そして論文全体は次のような彼らしい皮肉を込めた言葉で締めくくられている。

To be a textual critic requires aptitude for thinking and willingness to think; and though it also requires other things, those things are supplements and cannot be substitutes. Knowledge is good, method is good, but one thing beyond all others is necessary; and that is to have a head, not a pumpkin, on your shoulders, and brains, not pudding, in your head.

本文批判に携わるために求められるのは思考への適性と意欲である。もちろん他にも求められるものはあるが、それらは補助となるものであって、取って代わるものではありえない。知識は有益であるし、方法も有益である。しかし他のすべてに勝って不可欠なものがひとつある。それは肩の上にカボチャではなく頭を、頭の中にプディングではなく脳をもつことである。(Housman 1921: 1069)

このようにハウスマンの主張の核心は問題の個別性、機械的な規則ではなく思考の重要性の強調という点にある。一方で、議論の俎上に上るものが本文批判という具体的な技術に絞られているということ、またそれが必要とする資質に関する考え方に強い貴族主義的な性格、保守主義に対する過剰なまでの辛辣さが特徴的であると言うことができる。

3. クローチェとバスクアーリの論争

3. 1 クローチェの批判

これまでに見てきた「ラッハマンの方法」が広がりを見せた背景には、文学研究においても科学的・客観的な方法を求めようとする実証主義の影響がある。「ラッハマンの方法」はテキストを確定するための文献批判のレベルにおけるものであったが、文学作品の内容を論じる批評の領域でも、その作品が生まれた歴史的・社会的背景を調べ上げることで作品そのものの批評を行うという「歴史学派」(scuola storica)のような潮流も生まれた。そうした潮流に対して独自の美学理論の立場から批判を行ったのがイタリアの文学研究家・哲学者・美学者ベネデット・クローチェである。

¹⁹ ハウスマンのラッハマン、ハウプトに対する理解については Fiesoli (2000: 382-384) を参照。また Raimondi (1994: 25-26) はハウスマンの態度を懷疑主義というよりも理性をその適用範囲の限界まで拡張していこうとするものだったと評している。

文芸批評家としてのクローチェは初期には作家の逸話収集など外的側面に重点を置いた研究を行っていた²⁰。しかしそのような研究手法では文学作品の真の理解には及ばないと考えたクローチェは当時の文芸批評、文学研究への批判を通して独自の美学理論を形成していく。彼の思想を粗くまとめるならば、真の芸術作品には時代や社会を超越した普遍性があること、また芸術作品は社会や思想に還元できない個別的・独立的なものであり、芸術研究にはそうした外面的なものからのアプローチは妥当でないことという点が特に重要である。以下ではそうしたクローチェ美学による古典作品批評、それにともない展開された文献学者批判を見ていく。とくに着目するのは彼のテレンティウス論とプロペルティウス論である。

3. 2 テレンティウス批評

クローチェは自身の美学の集大成とも言える『詩について』(*La poesia*) を発表した1936年に「*La Critica*」誌上で「古代および近代の詩に関する研究」(*studi su poesie antiche e moderne*) という連載を開始している。これ以前のクローチェの文芸批評は主としてイタリア文学、とりわけ同時代のそれを対象としてきたが、この連載では古典古代の作品をも組上に載せるようになった。そしてその初回で取り上げられたのがテレンティウスであった。

この論考でクローチェが試みるのは、テレンティウスはギリシア喜劇の翻訳者であり彼には詩人としてのオリジナリティが欠如しているという否定的評価（とりわけ19世紀の批評家たちが下した評価）に対する反論である。テレンティウスの行った模倣や翻訳を消極的にとらえる見方に反発を示す一方、クローチェはテレンティウスの作品そのものを享受することの重要性を説く²¹。クローチェはメナンドロスとテレンティウスを笑いや人情という点で対照的に捉えている²²。そしてテレンティウスに通底している感情として *l'umana bontà* なるものを観取し²³、これを積極的に評価する。論文全体はこのようなテレンティウスの持つ価値、時代を超えた普遍性を強調して締めくくられる²⁴。一連の議論の中でクローチェはテレンティウスに否定的評価を下した人々を「芸術批評に心得のない文献学者たち *i filologi, impreparati alla critica d'arte*」(Croce 1936b: 406) と称して攻撃している。文献学を予備学たるべきものと捉えていたクローチェは、それが分際をわきまえず作品の価値判断にまで乗り出したことを非難しているのである。そしてそのようなテレンティウス像を示している者の一人としてパスクァーリにも矛先を向ける。

²⁰ クローチェのキャリアと著作活動、思想形成の全体像は國司（2016: 45-68）に詳しい。

²¹ Croce 1936b: 406.

²² «L'uno (=Menandro) , il greco, vivace e brioso e sorridente, e assai grazioso e arguto, e anche affettuoso e patetico in certe figure che presenta, come la Glycera e il soldato della *Perikeiromene* e l'Abrotonon e il Carisio degli *Epitrepontes* ; ma l'altro, fondamentalmente umano e commosso, e perciò poco disposto alla facezia e al riso». (Croce 1936b: 410)

²³ Croce 1936b: 413.

²⁴ «E nondimeno chi riapre il suo volume ne ritrae un sempre vivo compiacimento e dimentica la distanza degli evi». (Croce 1936b: 423)

3. 3 プロペルティウス批評

次にクローチェのプロペルティウス論に移ろう。これもまた同年の《La Critica》誌上に、掲載された論考で *Filologia ed estetica* (『文献学と美学』) と題されている²⁵。

クローチェがここで問題として取り上げるのはプロペルティウス『恋愛詩』2巻15番である。ドイツの文献学者ヤッハマンがこの詩のうち10行を真正なものではないとして削除したこと²⁶をクローチェは高く評価する。そしてこの箇所を削除せずに修正することで満足した人々を「よきセンス *il buon gusto*」を欠いているとする。クローチェはヤッハマンがプロペルティウスに対して行った仕事こそ「美的批評 *critica estetica*」であると言い、真正でない詩行が入り込んだプロセスについてヤッハマンが示した理論は、作品そのものを内在的に考察することで得られたものであるとする。そしてそのような理論は外的な資料によって立証される可能性もあるが、「歴史的現実 *realità storica*」と「美的現実 *realità estetica*」の一致という自らの美学理論にひきつけた上で、実際に重要なのは理論ではなく、問題の詩行がプロペルティウス自身の手になるものであるとしてもいずれにせよそれがその詩に属さない不適当なものであることだと言う²⁷。

またクローチェの文献学に対する考え方がよく示されている次のような点も重要である。

Il lavoro di analisi e di selezione che il Jachmann ha così ben compiuto per l'elegia properziana, si può esso, a rigor di termini, considerare lavoro «filologico», se la filologia, nei riguardi della poesia, è semplice indagine e raccolta di schiarimenti e informazioni storiche, che servono a porre le condizioni per intenderla nel suo intrinseco e prepararne il giudizio?

ヤッハマンがプロペルティウスの詩に対して見事に成し遂げた分析と選別の仕事は、厳密な意味で「文献学的な」仕事と言えるものだろうか、もし文献学というのが詩と比べた場合に、歴史的な情報や説明を単に調査し収集する行為——それらは詩をその本質において理解するための、またそれについて判断を下す用意をするための環境を整えるのに役立つものであるが——に過ぎないのだとすれば。(Croce 1936a: 299)

²⁵ 実はクローチェの議論は一方的に始められたものではなく、パスカーリの『文献学と歴史』(*Filologia e storia*, Firenze, Le Monnier, 1920) という著作を念頭に置いてそのタイトルを借用したものであると思われる。このパスカーリの著作は、エツレ・ロマニョーリの反文献学論に対して歴史科学としての文献学を擁護したものである。なおこれら議論について原典を抜粋してまとめた文献として Baldi e Moscadi 2006 があり、本稿執筆にあたっても参考にした。

²⁶ Jachmann 1935. なお後述のパスカーリはゲッティンゲンでヤッハマンと出会い親交を結んでいる。Cfr. Classen 1988: 139.

²⁷ «Ma per la realtà storica, che coincide con la realtà estetica, di quella elegia, la teoria anzidetta è, in fondo, indifferente, perchè quei brutti dieci versi potrebbero essersi formati ed esservi stati introdotti in altro modo — perfino (sebbene la cosa sia in questo caso improbabile) dallo stesso Properzio in un primo abbozzo o in un posteriore infelice additamento; — e tuttavia essi non appartenrebbero, o (ch'è lo stesso) intrinsecamente non appartenrebbero, a quella poesia» (Croce 1936a: 300-301) .

これに続いてクローチェがヤッハマンの引用を介して英国の古典文献学者ベントリー (Richard Bentley) の言葉を持ち出していることは興味深い。ヤッハマンは古代後期に存在したであろうプロペルティウスのエディションと、プロペルティウス自身の原稿との間の隔たりを乗り越えるためのものとして「理性 ratio」を掲げベントリーの言葉を引用する²⁸。クローチェもそのヤッハマンの引用を参照する形でこう述べている。

E questa considerazione dell'intrinseco, queste «ratio et res ipsa», che ... «centum codicibus potiores sunt» (p. 227), che altro sono mai se non la critica d'arte, la critica estetica della poesia: critica che il Jachmann esegue con tanta finezza di gusto nel caso di sopra esaminato da farci augurare e sperare che egli la estenda, come par che ne abbia intenzione, a tutto il canzoniere properziano, procurandone una edizione più soddisfacente delle ultime e pur pregevoli del Rothstein e Butler-Barber?

この内在的考察、この……「百の写本よりも有力な理性と事柄そのもの」は、芸術批評、詩の美的批評でないとするればそれ以外の何であろうか。先に検討したケースに対してヤッハマンが大変優れたセンスをもって行った批評は、彼がそれをプロペルティウスの詩集全体へと拡張し——彼にはそのつもりがあるように見える——、最近の——確かに価値はあるものだが——ロートシュタインやバトラーとバーバーのものより満足なエディションを編集するよう期待を持たせるものである。(Crocce 1936a: 299)

こうした言葉からは彼の反発がもっぱら「理性」や「センス」を欠いた同時代の文学研究のありように向けられているものであることがわかる。

以上に見たクローチェの古典文学批評において注目すべきは以下の二点である。すなわち、(1) 本章の冒頭にも述べたように、芸術作品は歴史的・社会的背景から切り離してそれ自体で理解すべきであり、真の芸術批評は美学的批評であると同時に歴史的批評ともなるというクローチェ美学の視点が適用されていること、(2) そのような真の芸術批評に対して文献学はいわば予備学であり、それは作品の真の価値を見定めることができないという考えに基づく文献学者批判が展開されていることである。

一貫して批判の対象となっているのは、歴史的な記録の収集に終始し、作品そのものの美的価値に眼を向けていない実証主義的な文学研究のあり方である。クローチェにとって、芸術作品の真の理解は直観に多くかかっており、作品そのものの内的な考察によらねばならず、外面的な資料収集や機械的な手法は拒否すべきものであった。

²⁸ Jachmann: 1935: 227. このベントリーの有名な言葉はホラーティウス『カルミナ』3巻27番15行への註釈の中で書かれているものだが、「我々にとっては理性と事柄そのものが百の写本よりも有力である nobis et ratio et res ipsa centum codicibus potiores sunt」というその直後に「とりわけヴァチカン古写本の支持が付け加わるならば praesertim accedente Vaticani veteris suffragio」という句が続いている。推定修正を多く残したベントリーの気質をよく表すものとして一連の句の前半ばかりが引用される傾向にあり (Pfeiffer 1976: 153-154)、ヤッハマンもクローチェも例外でない点は注目に値する。

とりわけプロペルティウス論においては議論が単なる作品評価に留まらず、詩行の削除の是非という本文批判上の問題にまで及んでいる点は重要である。

さて矛先を向けられていたジョルジョ・パスクアーリはこれに応える論文を発表している。その内容に移る前に彼の文献学者としての立場を簡単に見ておこう。

3. 4 パスクアーリの伝承史研究と系図法の限界

前章ではラッハマンの方法がその起源と名称に関して抱えていた問題と、その影響下に、科学的方法を騙る無思考へ向けられた批判を見た。しかし一方でまた、系図法そのものの効力が著しく制限されるケースに着目し、テキストの伝承史の重要性を説く形で批判を展開した学者もいた。それがイタリアの古典文献学者ジョルジョ・パスクアーリであった。

彼の名を最も知られたものにしてしているのは『伝承の歴史と本文批判』（*Storia della tradizione e critica del testo*）（初版 1934 年、第 2 版 1952 年）である。これはパウル・マース（Paul Maas）の『本文批判』（*Textkritik*）に対する書評²⁹をその出発点とし、最終的には 500 頁に及ぶ大著へと発展した記念碑的著作である。

簡潔で理論的に抽象化されたマースの本とは対照的に、パスクアーリは、古典テキストの伝承が作品ごとに様々に異なった性格を持つこと、すなわち問題の個別性を強調した。特に彼が問題とした「混成 *contaminazione*」と呼ばれるケース——写本が単一の親本から派生するのではなく異なる本をも参照してそれらの間で読みの取捨選択をしながら作成される場合——では、誤りを基準に写本を分類して派生関係を推定する系図法の前提が崩れ、その効力が相当程度制限されてしまうことが論じられた。

そこから導かれるのは、過度な単純化を避け、ある作品を伝える歴史的資料を可能な限り集め参照するという姿勢だった。「より新しい写本がより悪い写本というわけではない *recentiores non deteriores*」という言葉で、資料の新旧のみによりその価値を簡単に決めてしまうことに対して警鐘を鳴らしたのであった。

... ogniqualevolta nel Medioevo circolavano molti codici di un'opera, è probabile che molti siano andati perduti. E quanto più di una tale opera abbondano codici anche umanistici, tanto più probabile è che una parte di essi riproduca quei codici perduti.

ある作品の写本が中世に多く流通していた場合、多くの写本が失われた可能性がある。そしてそのような作品について人文主義時代の写本が豊かであるほど、それらの一部が失われた写本を写し取ったものである可能性は高くなる。（Pasquali 1952: 40）

パスクアーリの考えるテキスト編集者のあるべき姿は例えば次のような言葉によく表れているだろう。

Il miglior critico di un testo greco di tradizione bizantina sarà quello che, oltre a essere

²⁹ in «Gnomon» V (1929) : 417-435, 498-521 [rist. in Pasquali 1986: 867-914].

un perfetto grecista, sia anche perfetto bizantinista. Il miglior editore di un autore latino trasmesso in codici medievali o postmedievali sarà colui che, quanto il suo autore e la sua lingua e i suoi tempi e la lingua dei suoi tempi, altrettanto bene conosca il Medioevo o l'umanesimo. Un critico siffatto è un ideale che nessuno può incarnare in sé perfettamente, ma al quale ognuno ha il dovere di cercare di avvicinarsi.

ビザンツ時代の伝承を持つギリシア語テキストの最良の批評家とは、完全なギリシア学者であることに加えて完全なビザンツ学者でもあるような者のことであろう。中世及びそれ以降の写本によって伝えられるラテン作家の最良の編集者とは、作家やその言語、またその時代とその時代の言語とに通じているのと同じだけ、中世や人文主義についても熟知しているような者のことであろう。そのような批評家とはひとつの理想像であり何人たりとも自己のうちに完全な形で具現化することはできないが、誰しもがそれに近づこうと努めなければならない、そういう者なのである。(Pasquali 1952: 123)

3. 5 パスクァーリからクローチェへの反論

このようなパスクァーリの資料重視の姿勢がクローチェの批判対象となることはある意味必然的とも言える。パスクァーリの側からの批判は翌年 1937 年に《Leonardo》誌上に「クローチェと古典文献学」(*Croce e le letterature classiche*)と題して発表されている。

パスクァーリの反論は、まずクローチェが古典文学を扱い出したことへの驚き、古典語に対する彼の知識の不正確さを指摘することから始まる。そして議論をプロペルティウスに移す。クローチェの見解を全体として好ましくないとし、クローチェが行った文献学的・美学的という分類は自分にとってもヤッハマンにとっても重要ではないと冷ややかな態度を示す。そして古典テキストの伝承についてのクローチェの認識が正しくないこと（これに関してパスクァーリは自身の *Storia della tradizione e critica del testo* を読むようにクローチェに勧めている）、またヤッハマンが真正性を疑う判断に至ったプロセスをも捉えそこなっていることを指摘する³⁰。そして、ヤッハマンがプロペルティウスに関して駆使することを怠らなかった外在的な方法をクローチェは軽視していると批判した上で次のように言う。

Ma se, di fronte a un'interpolazione, al filologo dà l'allarme il buon gusto (che a lui in quanto filologo è vietato da Croce di avere), il sospetto non può divenire certezza se non per virtù di quel metodo «oggettivo» ecc. Solo esso insegna a distinguere con sicurezza interpolazioni da autointerpolazioni. La distinzione non importa all'esteta Croce? Importerà a molti altri.

だが、よきセンス——文献学者である限りにおいてそれを持つことはクローチェによって禁じられているのだが——は改竄に対する注意を喚起してはくれても、その

³⁰ Pasquali 1937: 765-766.

疑いが確実性に成るためには、そうした「客観的な」方法その他の力が欠かせない。それだけが改竄と著者本人による改変とを区別する術を教えてくれる。その区別は美学者クローチェにとっては問題とならないのだろうか。その他大勢にとっては重要なことだろう。(Pasquali 1937: 766)

テレンティウスに関しても同様にクローチェの理解の問題点が検証される。テレンティウスとメナンドロスの関係は、クローチェが引き合いに出すようなウェルギリウスとホメロスや、ラシーヌの『フェードル』とセネカの『パエドラ』のような関係ではない。またクローチェがテレンティウスに固有の要素としたものもメナンドロスやアポロドーロスにも見出されるべきものであるとし、クローチェが考えたようなテレンティウスとメナンドロスとの対照は「まやかしの区別 *illusoria distinzione*」であるとする³¹。

クローチェは、テレンティウスの発案と思しき箇所さえそれが改竄であるとか古代の註釈家の探り当てられなかったギリシア喜劇に依っているなどと考えてオリジナル리티を否定する「文献学者たち」を批判していた³²。たとえば『宦官』のアンティポールのシーンはモデルとなったメナンドロスの劇では役者が一人なのに対しテレンティウスが役者を二人にしたと伝えられているが、この箇所についてのクローチェの記述はヤッハマンがテレンティウスのオリジナル리티を主張し、パスカァリがそれに反対しているかのような印象を与えるものになっている³³。クローチェはヤッハマンの文献³⁴を参照させ彼の判断を優れたものと称する一方で、この箇所の芸術的価値を否定的に見ているとしてパスカァリに矛先を向けている。しかしパスカァリ本人によればクローチェは両者の主張を正しく理解していない。実際にはパスカァリはこのシーンがテレンティウスの発案であることを——ただしクローチェの好まない「外在的な方法 *estrinseco metodo*」によって——証明しようとしたのであって、クローチェはパスカァリに賛同してヤッハマンを攻撃して然るべきであったという³⁵。

全体としてクローチェとパスカァリでは今日的視点から見るとパスカァリの方に分があるように思われる。おそらくクローチェは自らが批判した歴史学派や文献学者の典型的な姿をパスカァリの中に見ていたのかもしれない。しかし、歴史科学としての文献学を擁護し研究対象の多様性と複雑性への認識を持っていたパスカァリ

³¹ Pasquali 1937: 770.

³² Croce 1936b: 408.

³³ Croce 1936b: 408 n. 3; Pasquali 1937: 767-768.

³⁴ Jachmann 1934: 634-637.

³⁵ Pasquali 1937: 768. このシーンに関するヤッハマンとパスカァリの議論は少なからず複雑なものでクローチェが混乱したとしても無理はないかもしれない。ヤッハマンはアンティポールという人物は卓越した詩人によって考え出されたものだの高い評価を下して最終的にそれをメナンドロスに帰している (Jachmann 1934: 636-637)。それに対してパスカァリは、問題のシーンが機知に富んだものであることは認めつつもヤッハマンの評価を行き過ぎとして、この新しい導入が劇の他の箇所と微妙な齟齬を生じていることを示し、これはメナンドロスではなくテレンティウスが（ここでもメナンドロスを随所で模倣しながらであるが）創出したものと考えた (Pasquali 1936: 611)。

の姿勢はクローチェが批判していた実証主義的な歴史学派のそれとは異なっている。また伝承の重視という点で保守的な性格を持っただけでも、彼の態度は、例えば先に見たような反ドイツの立場から保守化した一部の文献学者たちのそれとも本質的に異なるものであると言える³⁶。

しかしまた芸術批評から本文批判までに亘り挑戦的な議論を展開したクローチェの役割の大きさは無視できない。作家や詩人をその外的な事実の収集から理解できるとした実証主義、過度の歴史主義に対する反発がクローチェ美学の出発点となったのだとすれば、そのクローチェの晩年に、歴史的現実の重視という観点から書かれたパスクァーリの書物が現れ両者の間にこのような論争が行われたことは、この時代の文学研究、文献学が直面していた問題を反映しているという点において意義深いことである。

4. バルビの「新しい文献学」

以上に見てきたような文献学、文学研究をめぐる複雑な状況の中、イタリア文学において新しい指針を示したのが、とりわけ『新生』の校訂に携わったダンテ学者として名高いミケーレ・バルビであった。彼の示した方向性は1938年に出版された *La nuova filologia italiana e l'edizione dei nostri scrittori da Dante a Manzoni* の序文によく示されている。

4. 1 パスクァーリとの接点・交流

バルビは、よい校訂版を作るために直面する問題に触れた際、様々な可能性のひとつとして著者自身による異読の存在を論じた学者としてパスクァーリの名前に言及している³⁷。またパスクァーリの方もバルビの名前に言及しており、彼はこの本の書評も書いているほか³⁸、バルビの没後に彼を回顧する記事も書いている³⁹。パスクァーリは自らの伝承研究や自身の用いた用語をバルビが評価し採り入れてくれたことを誇らしく語りつつ、こうした着想の先駆けとしてバルビの『デカメロン』研究があったことを明らかにしている⁴⁰。またバルビの文献研究の手法に古典文献学の影響のあることも指摘されていることには注意してよいだろう⁴¹。

³⁶ そしてそのような姿勢の形成には、古典古代学の流れを引き継ぐヴィラモヴィッツ・メレンドルフなどのドイツの文献学者たちから受けた影響が少なくないと考えられる。パスクァーリの生涯にわたる古典学関連の著作活動とその背景については La Penna: 1988 を参照。La Penna はパスクァーリの形成におけるイタリアの文献学者たちの影響にも目をむけつつ、ゲッティンゲン滞在を筆頭としてドイツの文献学から受けた影響の重要性を強調することを忘れない (La Penna 1988: 17-25)。また彼の著作とドイツの学者たちとの結びつきについては Classen (1988: 144-145) も参照。

³⁷ Barbi 1938: XIII.

³⁸ *L'edizione dei classici italiani da Dante al Manzoni*, in «Leonardo» IX, 471-483 [rist. in Pasquali 1994, 154-175].

³⁹ Pasquali 1942.

⁴⁰ Pasquali 1942: 443. また Pasquali 1952: 427 も参照。

⁴¹ Pasquali (1942: 441-442) はギリシア学者のエネーア・ピッコローミニ (Enea Piccolomini) の名前に触れている。バルビ自身の言葉としては Barbi (1938: VIII) を参照。

4. 2 方法のひとつとしての系図法

彼はまた伝承の複雑さやそれが持つ問題をよく考慮すべきであるという点でパスクァーリと認識を共有している。そして古代と中世とでのテキストの性質の差異をも踏まえた上で、それでも経験上一定の効用が認められる系図法を完全に放棄するのは賢明ではないと主張する。画期的な万能の方法としてではなく、数ある方法のうちのひとつとして系図法を再評価するのである⁴²。

I casi che si presentano a un ricostruttore di testi medievali sono in realtà infiniti: ...Ma non tutte le opere si sono trasmesse, o si potevano trasmettere, in simil modo, e anche nel medioevo molti sono i testi che si riproducono in modo identico o poco diverso da quelli dell'antichità, e quindi né per lo studio né per l'edizione di essi giova abbandonare i metodi che si sono sperimentati utili e più sicuri per quelle più antiche opere, debitamente integrati e adattati ai singoli bisogni.

中世のテキストを再建しようとする者が直面する状況は実際のところ数限りないものである……だが全ての作品が同様の仕方で伝えられているわけではないしそのように伝えられることはありえなかったろう。また中世においてもその複製のされ方が古代と同じかあまり変わらないテキストが存在している。したがってそれらの研究においてもエディションにおいても、個別の必要に応じてしかるべく補完し調整されれば古代の作品に関して有益で比較的確実であることが経験上確かめられている方法を放棄するのはためにならない。(Barbi 1938: XX)

彼は若いときにダンテ協会から与えられた『新生』や『詩集』のエディションの準備、『神曲』の校訂版のための計画という仕事を振り返りつつ自らの経験を語っている。『神曲』については先達たちが写本の一部をいわば恣意的に選び出して分類を行おうとしたのに対し、バルビは全体的な調査によって写本の選別を行うべきと考えた⁴³。他方で個々の読みを選択するに当たっては、文脈や言葉づかいなど内的な基準を適用することも躊躇わなかった。その方針とは、彼自身の言葉によると、

... l'edizione dovesse essere ricostruzione critica sul fondamento di tutte le tradizioni, e non riproduzione d'un testo scelto come il migliore e corretto solo degli errori evidenti; e ciò non soltanto per le lezioni di senso, ma anche per il colorito linguistico e gli usi sintattici.

エディションとは、最良のものとして選び出して明白な間違いのみを修正したテキストの複製ではなくて、伝承全体に基づく批判的な再建であるべきである。そしてそれは、意味の解説だけでなく、言語上の色合いや統語的な習慣などにも基づかね

⁴² したがって彼はカンタンやベディエの採ろうとした方向性からも距離を置く。Cfr. Barbi 1938: XVI-XXII.

⁴³ Barbi 1938: VIII-IX.

ばならない…… (Barbi 1938: IX)

というものであった。そしてそれに対する反発や危惧もあったと述べている⁴⁴。

結局のところ、バルビが強調しているのは、問題の複雑さ・多様性と、それに取り組むにあたっての「単純化」に対する反対の態度であった。彼は方法よりも方法を適用する人間の方に厳しい眼を向け⁴⁵、「理性ragione」が中心的な役割を果たすべきであることを強調している。

E non dobbiamo aver paura del soggettivo, che non è di necessità l'arbitrario: al contrario quanto più si desiderano procedimenti obiettivi, tanto più va portata in prima linea la ragione come principale fattore in ogni operazione che giovi a un'edizione veramente critica: ...

主観的であること——これは必ずしも恣意的であることを意味しない——を恐れるべきではない。反対に、客観的な手続きが要求されるほどますます、理性というのが、本当の意味での批評版に貢献するあらゆるはたらきのうちの中心的要素として第一線に出されなくてはならない。(Barbi 1938: XXIII)

バルビの力点が、客観性の追及という名目で「判断」という「批評版 edizione critica」に本来不可欠であるはずの要素が排除されていることへの批判にあることは明白である。ラッハマンの方法に一定の留保を加えながらそれを再評価することで、むしろ校訂という仕事のなかでの思考や判断の重要性を再考したと言えるであろう。

4. 3 クローチェ的批評への理解と批判

バルビ自身が語っているところによれば、19世紀後半の歴史的・文献学的研究の方向性が正しく理解されず一種の銜学や機械的な営みと混同されたために批判に晒され、「批評 critica」という言葉が「詩作品の美的価値判断 la valutazione estetica delle opere poetiche」にのみ用いられるようになってしまったと言う⁴⁶。ここでバルビが特に意識しているのはクローチェであろう。先に見たように、実証主義や歴史学派への批判からクローチェは、独自の美学理論を構築し、文献学を必要でこそあれ予備学的なものと位置づけていたのであった。こうした反発に対してバルビは次のように問いなおしている。

Ma da che era mossa quella piega storico-filologica che avevano preso gli studi se non

⁴⁴ Barbi 1938: IX-X.

⁴⁵ «... ed io credo proprio che, piuttosto che del metodo in sé, sia da diffidare di chi l'ha applicato, vedendo quanti si son messi e si mettono intorno a queste faccende senza esperienze né semplici né complesse e senza aver da natura quelle felici disposizioni che a lavoro così delicato occorrono». (Barbi 1938: XXII)

⁴⁶ Barbi 1938: XXIV.

dal desiderio di una conoscenza precisa e intera del mondo reale e spirituale in cui le opere d'arte erano nate, per intenderle e sentirle nella loro intima natura, nella loro varia ricchezza, nei più minuti particolari, e giudicarle così, non con criteri astratti o per l'impressione che producono creazioni d'altri tempi sulla psicologia di noi uomini moderni, ma nella concretezza della loro vita interiore rivissuta da noi per forza di studio ordinato ed esauriente?

だがそうした研究を占めていた歴史的・文献学的な方向性はどこから出てきたものだったのだろうか、芸術作品が生まれた現実世界・精神世界を正確にまた完全に知ろうという欲求——作品をその深い本性において、様々な豊かさにおいて、最も詳細な部分において理解し感じ取るため、また、抽象的な基準や我々近代人の心理に基づいた別時代の創造物が生み出す印象によってではなく、組織だった徹底的な研究をとおして我々により生き直されたその内面的な生の実体において評価するための欲求であった——からでないとすれば。(Barbi 1938: XXIV)

彼は、「行過ぎた、性質の悪い文献学至上主義や歴史主義への反動 la reazione contro il filologismo e lo storicismo esagerato e di cattiva lega」は正当なものであるとして理解を示しつつも、そうした運動の必然として、斥けるべきでないものまで斥けようとしてしまったと指摘している⁴⁷。ここからバルビの問題意識が単なる方法の是非というレベルにとどまらず文学研究のあり方を巡って分断されていた「批評 critica」を融和させ文献学の再興を目指すものであることが読み取れる。

Già la nostra generazione reagiva ai suoi maestri che volevano l'edizione critica senza la critica, l'*emendatio* senza l'*interpretatio*, e mirava a uno storicismo totalitario e distingueva benissimo che la vera vita del poeta non era quella esteriore. Se la filosofia è coscienza dei problemi e dei mezzi migliori per risolverli, ... quei filologi eran filosofi anche se non usavano il frasario venuto oggi di moda.

すでに我々の世代は、批評なき批評版、解釈なき校訂を望んだ師らに反対していた。そして包括的な歴史主義を目指し、詩人の真の生が外面的なそれと異なることをよく認識していた。哲学が問題と、それを解くための最善の方法を認識することであるならば……そうした文献学者たちは、たとえ今日流行の言葉づかいをしていなくとも、哲学者であったのだ。(Barbi 1938: XXV)

このように自分たちの世代が歩む道を語る彼の言葉には、文献学と哲学との接近とも呼びうるものが見出せるだろう⁴⁸。

⁴⁷ Barbi 1938: XXV.

⁴⁸ この著作が世に送られた 1930 年代のイタリアにおける文化的閉塞感や危機的状況、また filologia の再興の兆しについて Dionisotti は次のように書いている。«eravamo tutti, o quasi tutti, già prima della guerra abbondantemente stanchi, nonché sazi, di tali discussioni. La crisi era aperta ... Non era chiaro affatto come si potesse in Italia uscire dalla crisi. Ma era chiaro che non ne saremmo usciti per

最後に

文学研究、文献学のある種の閉塞状況のなかでそれを批判したという点において、古典文献学とイタリア文献学という領域の違いこそあれ、ハウスマンとバルビとの間に主張の類似性を見るのは不自然なことではない。問題の個別性の認識、また求められる資質の生得性、理性・思考の重要性の強調といった点がそうである。実際、ヴィットーレ・ブランカはバルビのこの本のリプリント版への序文の中でハウスマンの名前を挙げて両者の類似性を指摘している⁴⁹。

しかしハウスマンにとっての「批判 critica」がどこまでも「本文批判 textual criticism; critica testuale」という具体的な実践の一面に集中していたことと比べると、バルビの呈示した方向性は、すでに見たようにより広い射程を持っているように思われる。

La nostra generazione non ha da mutare strada, ma da compiere il suo programma, che è sempre stato quello della critica senza aggettivi...

我々の世代は道を変えるべきなのではなく、その計画——常に「形容詞なき批評 critica senza aggettivi」の計画であったもの——の完遂を目指すべきなのである…… (Barbi 1938: XXV)

このように呼びかけたバルビの姿勢は、様々な形容詞を伴って分化してしまった「批評 critica」を回復しようとするものであり、また同時に、哲学と文献学の総合という側面をも持っていたと考えることができる⁵⁰。そしてこのような方向性が拓かれたのはクローチェやパスクァーリによって提起され深められた議論の存在が欠かせないものであっただろう。「客観的方法」を求める時代状況の中で文献学を巡って呈示された対立、そしてその総合という文脈を踏まえれば、バルビのイタリア文献学史上の重要性も改めてよく認識されることであろう。

文献一覧

【欧文参考文献】

Baldi G. D., Moscardi A.

2006 *Filologi e antifilologi: le polemiche negli studi classici in Italia tra Ottocento e Novecento*, Firenze, Le Lettere.

virtù di ciarle accademiche. Nel campo delle lettere la filologia per la sua aderenza e subordinazione ai fatti, per la preziosità stessa del suo linguaggio scarno e preciso, tornava di moda». (Dionisotti 1962: 224-225)

⁴⁹ Branca 1994: 12.

⁵⁰ ここにブランカはヴィーコへの回帰を認めている。「Era, in certo senso, un ritorno al Vico, alla sua identificazione di filologia e filosofia: che vedeva congiunte nella lettura di un'opera la perizia della critica formale e la capacità di intendere e di valutare il mondo spirituale che in quell'opera si spiega». (Branca 1994: 11)

- Barbi M.
1938 *La nuova filologia e l'edizione dei nostri scritti: da Dante al Manzoni*, Firenze, Sansoni [rist. con la bibliografia degli scritti di Michele Barbi a cura di Silvio Adrasto Barbi, introduzione di Vittore Branca, Firenze, Le Lettere, 1994, da cui si cita].
- Bédier J.
1928 *La tradition manuscrite du «Lais de l'Ombre» : réflexions sur l'art d'éditer les anciens textes*, in «Romania» LIV, 161-196, 321-356 [rist. Paris, Honoré Champion, 1970, da cui si cita].
- Branca V.
1994 *Introduzione* a M. Barbi, *La nuova filologia e l'edizione dei nostri scritti: da Dante al Manzoni*, Firenze, Le Lettere, 5-19.
- Butterfield D.
2013 *The Early Textual History of Lucretius' De rerum natura*, Oxford, Oxford University Press.
- Classen C. J.
1988 *L'influsso di Giorgio Pasquali sulla filologia classica in Germania*, in Bornmann, F. (a cura di), *Giorgio Pasquali e la filologia classica del Novecento*. Atti del Convegno Firenze-Pisa, 2-3 dicembre 1985, Firenze, Olschki, 135-158.
- Contini G.
1986 *Breviario di Ecdotica*, Milano, R. Ricciardi.
- Croce B.
1936a *Filologia ed estetica: a proposito della El. II, 15 di Propertio*, in «La Critica» XXXIV, 296-302.
1936b *Intorno alle commedie di Terenzio*, in «La Critica» XXXIV, 401-423.
- Dionisotti C.
1962 *Testimonianze a Don Giuseppe De Luca*, in «Lettere italiane» XIV, 223-227.
- Fiesoli G.
2000 *La genesi del lachmannismo*, Firenze, Sismel.
- Haupt M.
1911 *De Lachmanno critico*. Rede, gehalten beim Antritt des akademischen Lehramts in Berlin (12, August 1854), in «Neue Jahrbücher für das klassische Altertum, Geschichte und deutsche Literatur» XXVII, 529-538.
- Housman A. E.
1903 *M. Manilii Astronomicon liber primus*, Londinii, Grant Richards.
1921 *The Application of Thought to Textual Criticism*, in «Proceedings of the Classical Association» XVIII, 67-84 [rist. in Diggle, J., Goodyear, F. R. D. (a cura di), *The Classical Papers of A. E. Housman*, 3 voll., Cambridge, Cambridge University Press, 1972: 1058-1069, da cui si cita].
1926 *M. Annaei Lucani Belli civilis liber decem*, Oxonii, Blackwell.
- Jachmann G.
1934 *Terentius*, in Pauly-Wissowa, *Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, V A 1, Stuttgart, Druckenmüller, 598-650.
1935 *Eine Elegie des Propertius: ein Überlieferungsschicksal*, in «Rheinisches Museum für Philologie» LXXXIV, 193-240.
- Kenney E. J.
1974 *The Classical Text: Aspects of Editing in the Age of the Printed Book*, Berkley, University

- of California Press.
- La Penna A.
1988 *Gli Scritti filologici di Giorgio Pasquali*, in Bornmann, F. (a cura di), *Giorgio Pasquali e la filologia classica del Novecento*. Atti del Convegno Firenze-Pisa, 2-3 dicembre 1985, Firenze, Olschki, 15-77.
- Pasquali G.
1936 *Un personaggio e due scene dell'«Eunuco»*, in «Studi Italiani di Filologia classica», n.s., XIII, 117-129 [in Pasquali 1986: 606-615, da cui si cita].
1937 *Croce e le letterature classiche*, in «Leonardo» VIII, 2, 45-50 [rist. in Pasquali 1986: 762-771, da cui si cita].
1942 *Ricordo di Michele Barbi*, in «Rend. Accademia d'Italia» 67-83 [rist. in Pasquali 1994: 434-451, da cui si cita].
1952 *Storia della tradizione e critica del testo*, Firenze, Le Monnier [1^a ed., Firenze, Le Monnier, 1934; rist. anast. della 2^a ed., Firenze, Le Lettere, 1988, da cui si cita].
1986 *Scritti filologici*, 2 voll., a cura di F. Bornmann, G. Pascucci, S. Timpanaro, Introduzione di A. La Penna, Firenze, Olschki.
1994 *Pagine stravaganti di un filologo*, II, a cura di C. F. Russo, Firenze, Le Lettere, 1994.
- Pfeiffer R.
1976 *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850*, Oxford, Clarendon Press.
- Raimondi E.
1994 *Filologia e critica*, in *Convegno Internazionale sul tema: La filologia testuale e le scienze umane*. organizzato in collaborazione con l'Associazione Internazionale per gli Studi di Lingua e Letteratura Italiana (Roma, 19-22 aprile 1993), Roma, Accademia Nazionale dei Lincei («Atti dei Convegni Lincei», 111), 19-32.
- Stoppelli P.
2013 *Filologia della letteratura italiana*, Roma, Carocci [1^a ed., 2008].
- Timpanaro S.
1953 *Delle congetture*, in «Atene e Roma» s. IV, 3, 95-99 [rist. in *Contributi di filologia e di storia della lingua latina*, Roma, Edizioni dell'Ateneo & Bizzari, 1978: 673-681, da cui si cita].
1985 *La genesi del metodo del Lachmann*, Padova [1^a ed., Firenze, Le Monnier, 1963; rist. Torino, UTET, 2004, da cui si cita].

【邦文参考文献】

- 國司航佑
2016 『詩の哲学：ベネデット・クローチェとイタリア頽廃主義』、京都、京都大学学術出版会。
- 松原秀一
1963 「フランス中世文学の写本と校訂法：ベディエの立場を廻って」『藝文研究』第16号、107-121。